

平成19年8月29日  
株式会社 アサツー ディ・ケイ

## 頑張れシニア男性

**60才をこえて働くワーキングシニアが、今後の日本の新しいシニア像を  
生みだすことを、皆が願い・期待している。**

～雇用延長により、働く高齢者男性の増加は、他の世代からどう受け止められているのか～  
(ADK生活者総合調査結果から)

株式会社アサツー ディ・ケイ(本社：東京都中央区、取締役社長：長沼孝一郎、以下ADK)では、2000年より「ADK生活者総合調査」「ADK体験接点調査」など、生活者を取巻く環境を総合的に捉える自主調査を定期的実施しており、生活者の意識、消費行動、情報メディアや広告との関わり、商品やブランド(銘柄)とのつながりなどの総合的な生活者データベースの整備をしております。

このたび「第16回ADK生活者総合調査(2007/05実施)」から、高齢者雇用安定法改正などにもとない、今後予想される60才以上の勤労男性の増加が、シニア世代(50代以上)そして他の世代からどのように受け止められ、どのような期待を抱かれているかについての調査結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

高齢者雇用安定法の改正を背景に、定年を迎えた団塊世代の再雇用・雇用延長などの動きがみられる中、60才を越えて働き続けるシニア男性の増加を、他の世代はどう感じているのか。またシニア男性自身は、働き続けることについて、どのような意識を持っているのか。日本全体の高齢化が進行する中、また職場の高齢化も同時に進行していきます。

若者も含めた日本人全体が、この不可避ともいえる現象についてどのように考えているのかについてADKで調査を行った結果、各世代とも男性は60才をこえても働くべきだという回答が8割を超えていることが明らかになりました。また、働くシニア男性の増加は、経済・社会に活気をもたらすものとして前向きに評価されていることもわかりました。

団塊世代が定年を迎えながらも、さらに働き続けることは、日本社会のニーズであり、期待であり、また今までにないシニア像が生まれるきっかけとなりそうです。

- ①13-69才男女の80%以上が、男性は60才を過ぎても働くべきだと考えており、シニア男性の雇用延長は、全年代から前向きに受け止められている。
- ②働くシニア男性が増えることで、シニアの消費が活性化し、経済に好影響を与えることを、70%の人が期待。(13-69才男女全体で)
- ③20-40代の給与所得者男性の85%以上が、シニアからの仕事ノウハウなどの継承を期待。
- ④全ての年代で、3人に1人は、働くシニア男性の増加による、新しいシニア像の誕生を強く期待。  
(新しいシニア像が生まれる = 非常にあてはまる:31% 非常に+ややあてはまる:86%)

この調査結果に関するお問合せ先

コーポレート本部 広報室 矢島 正司 Tel:03-3547-2003/e-mail:yajimas@adk.jp  
R&D本部コミュニケーションサイエンス局生活者研究グループ 栗田 英一  
Tel:03-3547-2136/e-mail:kurita@adk.jp

## 調査詳細及びデータ

### <「第16回ADK生活者総合調査」概要>

|          |   |
|----------|---|
| 調査目的:    | 生活者の意識、価値観、行動を捉え、広告戦略立案などの、参考に供するデータベースを構築する。 |
| 調査地域:    | 首都圏   |
| 調査対象:    | 12～69才男女                                      |
| 回収サンプル数: | 2941人   |
| 調査方法:    | 郵送調査  |
| 対象者抽出方法: | 調査会者保有のモニターパネル登録者より、人口構成に応じ割り当て抽出             |
| 調査期間:    | 2007年5月9日～6月8日                                |

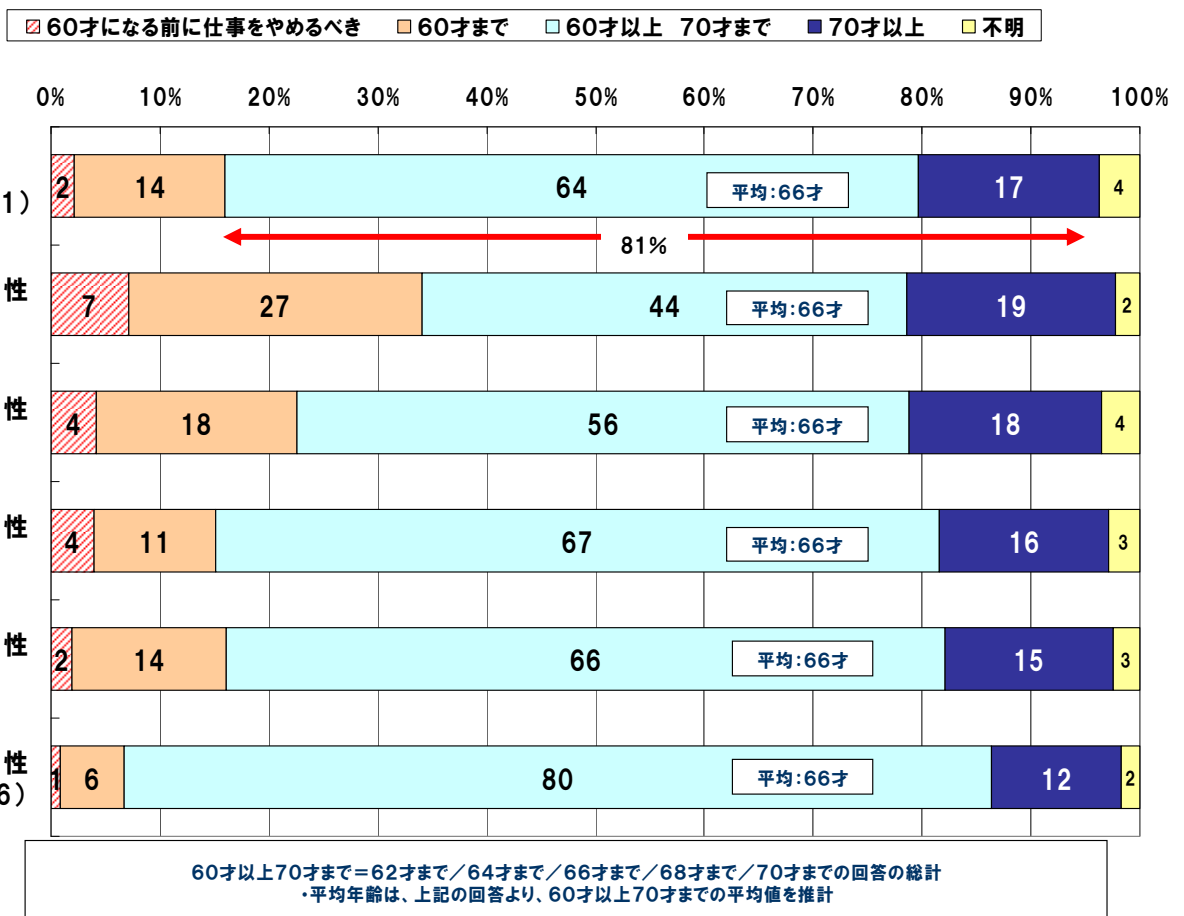
# ■ 大多数の人が、シニア男性は60才を超えても働くべきと考えています。

全体の81%が、60才以上まで男性は働くべきだと回答。高齢者の雇用延長は日本社会のコンセンサスになりつつあるのでは？

男性は何才まで働くべきかについて、13才から69才までの男女に調査をいたしました。  
(また、他の年齢層のサラリーマン男性の意見をみるために、20～50代の給与所得者男性と60代男性を比較してみました)

- ・全体(13-69才男女)の80%以上が、60才を過ぎても男性は働くべきだと考えています。  
また、30才代男性(給与所得者)で70%以上、40～50代男性(給与所得者)で80%以上が同様の回答をしています。
- ・70才以上まで働くべき、という回答も全体で17%ほど存在しましたが、6割をこえる人が、62才まで、64才まで、66才まで、68才まで、70才まで の5つの選択肢のどれかを選んでおり、その中での平均年齢は(60才以上70才まで)は、66才となっています。

図1：男性は何才まで働くべきか？



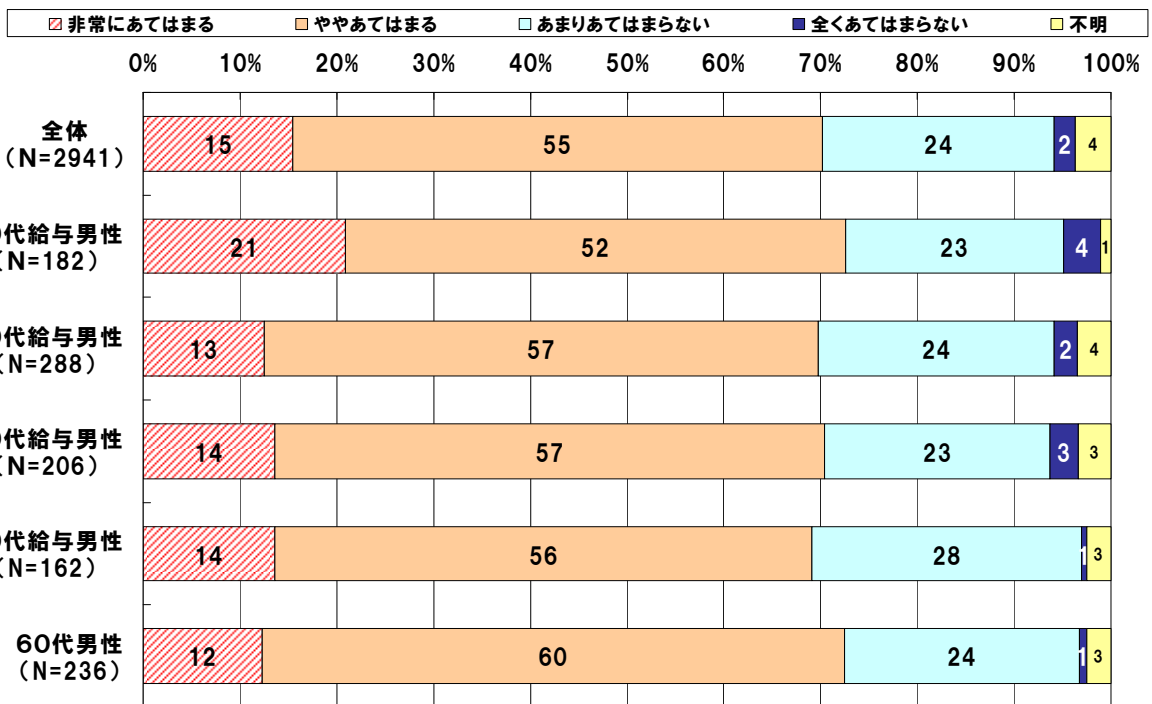
# 働くシニア男性が増えることが、シニア消費が活性化し、経済に好影響を与えることを、70%の人が期待しています。

働き続ける60才以上の男性が増えることで、どのようなことが期待できるのか。同様に13才から69才までの男女に調査をいたしました。

(また、他の年齢層のサラリーマン男性の意見をみるために、20～50代の給与所得者男性と60代男性を比較してみました)

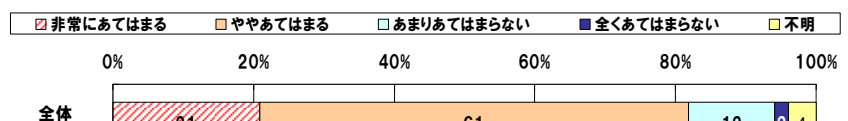
- ・全体(13-69才男女)の70%以上が景気に好影響を与えると回答しており、またどの年齢層においても同程度の期待をもたれています。働くシニア男性の増加による、新しい消費や市場の創出効果が期待されているようです。

図2: 働き続ける60代男性が増えることで期待できること  
(シニアの消費が増えるので、景気の維持向上が期待できる)



<参考>

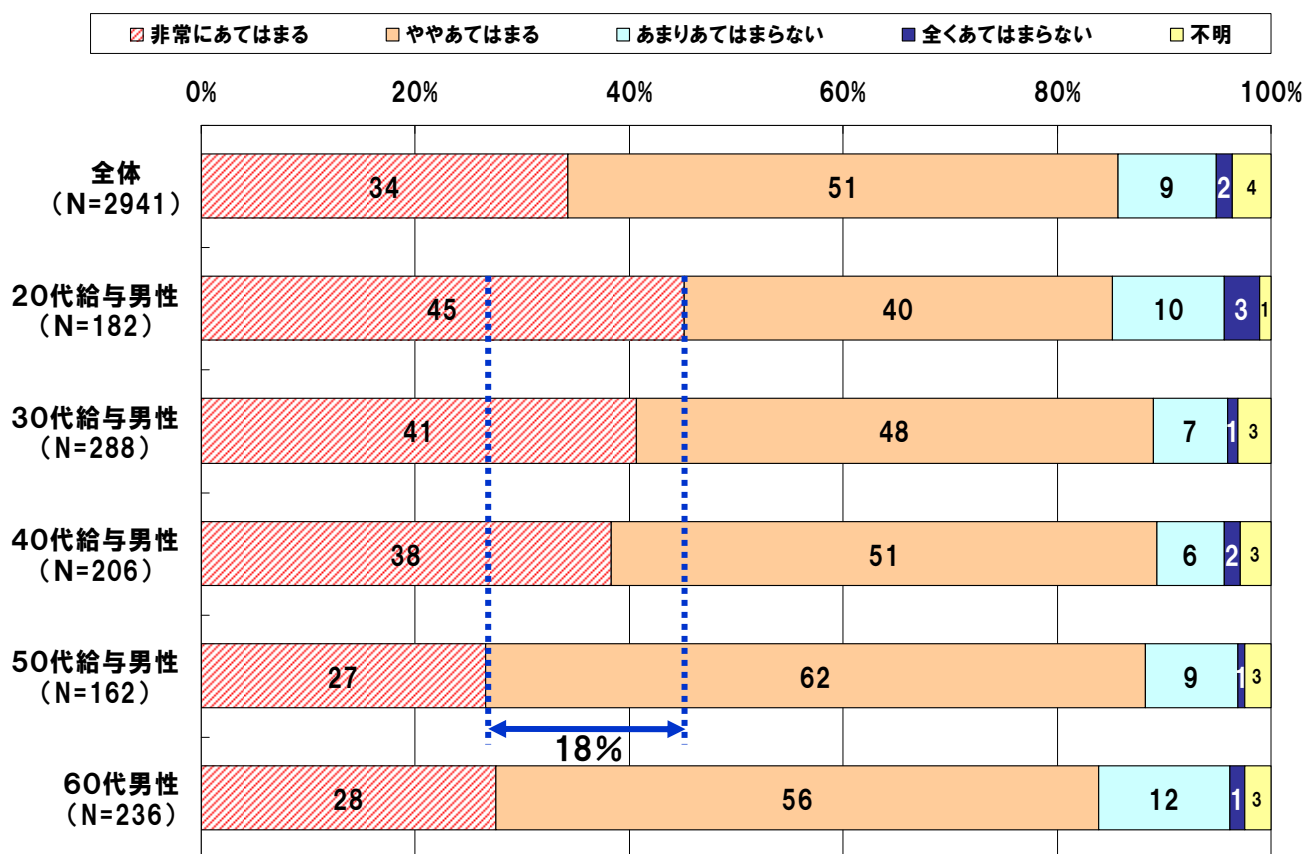
働き続ける60代男性が増えることで期待できること  
(新しいシニアの消費・市場が生まれる)



■働く60才以上の男性が増えることで、彼らの仕事の技能やノウハウが継承できるようになるとの期待が大きくなっています。  
 (ノウハウ継承の期待が大きい20～40代男性、ちょっと自信のない50～60代男性)

- ・全体(13-69才男女)の85%が、「シニアの仕事の技能・ノウハウが継承できる」と答えています。
- ・またこの期待について「非常にあてはまる」と答えた人は、20代の給与所得者男性で最も高く45%に達しています。  
 シニア男性の持つ技能やノウハウを継承できることに対して、若い人の中にも熱い期待があるようです。
- 一方、50代の給与所得者男性では、「非常にあてはまる」が、27%にとどまっています。  
 当人たちは自分自身が持つ技能を、若い人ほど評価していないのかもしれませんが。

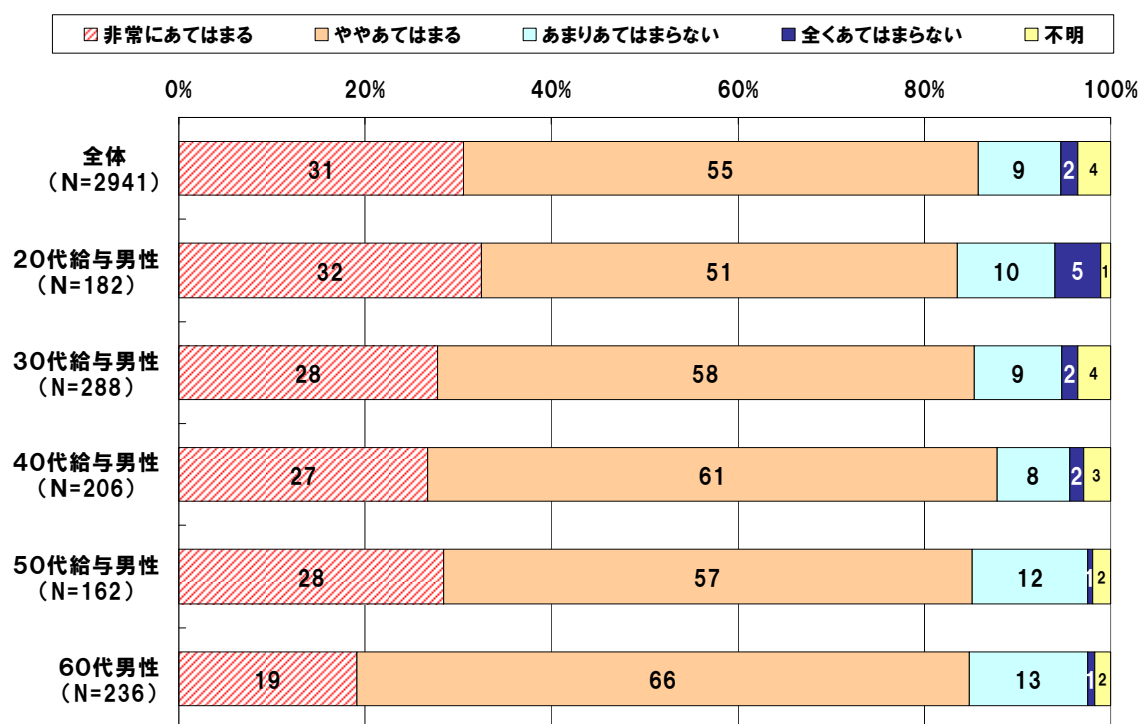
図3:働き続ける60代男性が増えることで期待できること  
 (シニアの仕事の技能・ノウハウが継承できる)



## ■全ての年齢層において、3人に1人は、ワーキングシニアが増えることで新しいシニア像が生まれることを強く期待感しています。

- ・全体(13-69才男女)で86%の人が、新しいシニア像の誕生が期待できるのではないかと考えています。
- ・またこの傾向は全ての年代に共通しており、働き続けるシニアを、いままでのような“老人”として扱う気持ちは、若い人たちにもないようです。

図4：働き続ける60代男性が増えることで期待できること  
(定年後＝老人ではない、新しいシニア像が生まれる)



### <参考>

働き続ける60代男性が増えることで期待できること  
(オシャレなシニアが増える)

